小児気管支喘息の生活指導指針

分担研究者　京都大学小児科　三河春樹

研究協力者　北海道大学小児科　松本脩三

国立相模原病院アレルギー科　三嶋　健

東京大学小児科　早川　浩

国立小児病院アレルギー科　飯倉洋治

埼玉医大小児科　赤坂　徹

同愛記念病院小児科　馬場　実

九段坂病院　島貫金男

神奈川県立こども医療センターアレルギー科　寺道由晃

国立療養所南福岡病院小児呼吸器科　西間三馨

星薬科大学薬理　柳浦才三

〔研究目的〕

小児気管支喘息の発症病理について遺伝的に固定された部分と社会的，家庭内環境因子に依存して可変性をもつ部分がある。過去2年間の研究成果によって気管支喘息の長期予後と薬剤治療の限界が示され，また小児気管支喘息治療を阻む難治化要因の解明とその検出法が開発された。本年は患児のより詳細な分析によってより適切，明解な生活指導法を確立するため昨年迄の研究をさらに敷衍するとともに，喘息素因についても根本的な検索をおこなった。

〔研究計画〕

昨年来共通テーマとして行った気管支喘息患児の発症とその長期予後についての20年間以上の追跡調査はさらに一部の成績を追加して所定の作業を終了し，総括研究報告書の中に収録することとした。本年の各個研究は喘息素因を形成する諸因子の分析と，環境因子に関する検討を行った。

〔研究成果〕

まづアレルギー喘息が HLA-D 領域の抗原性と緊密に相関することが明らかにされ（松本）素因の遺伝についての指導要項に加えられる処が多くなった。また素因の検出法としてIgE産生細胞の定量法の確立（三河）は今後の臨床に画期的な成果となろう。食餌抗原の消化管からの吸収度の検討（三島），迷走神経と交感神経の気道収縮に関する相互作用（柳浦）は喘息発作の予防と対策についての基礎知識を与えた。地域的な調査ではあるが児童における気管支喘息の実態（西間）は近年における患児増多の実態を伝えた。喘息児の家庭訪問によって得られた家庭環境の実態とダニの分布調査（飯倉），患児の学校生活に現われる父母と教師の指導方針のづれ（早川）に患児取扱い上の問題点が多く提示された。気管支喘息児の経過と気道の過敏性との関連についての研究（馬場，寺道）は気管支喘息の予防と予後を修飾する諸因子の抽出に有効な示唆を与えた。喘息児の親子関係の診断について（赤坂）も定量性が確立されたのは心理分析の分野で特筆されるものである。気管支喘息治療の問題点についても問題点の２，３が解析された（島貫）。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

〔研究目的〕

小児気管支喘息の発症病理について遺伝的に固定された部分と社会的,家庭内環境因子に依存して可変性をもつ部分がある。過去2年間の研究成果によって気管支喘息の長期予後と薬剤治療の限界が示され,また小児気管支喘息治療を阻む難治化要因の解明とその検出法が開発された。本年は患児のより詳細な分析によってより適切,明解な生活指導法を確立するため昨年迄の研究をさらに敷衍するとともに,喘息素因についても根本的な検索をおこなった。